

令和3年度すくすく泉事業 実績報告書

(団体名：NPO 法人 いずみの会)

【事業名称】
「すくすく泉」事業
【事業目的】
<ul style="list-style-type: none">・ 保育・ひろば(一時預かりを含む)を2本柱として、地域子どもたちが地域みんなに愛されて育つ場をつくれます。・ 樹木に囲まれた自然空間や泉文庫の豊富な絵本等の蔵書を活かして子どもの感性を育み、そこで過ごす子どもにとって、楽しく豊かな原風景となる場をつくれます。・ 地域の中の多世代の交流を大切に、子育てを通してみんなが豊かな時を過ごし、子育ての不安感、負担感、孤立感を軽減し、相談しやすく、様々な子育て情報を得られる場をつくれます。
【事業内容】
<p>【子育てひろば事業】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 乳幼児親子の日常的な居場所として、育児不安の支えとして、地域とのつながりの入り口として、誰もがホッとする心地のいい場の提供。・ 多胎育児、低月齢、特別な配慮が必要な子、転居間もない親子、外国人の親、祖父母育児、など、さまざまな育児のスタイルがあり、それぞれが抱える不安がある。どんな親子にも寛容な場であり、気軽に来てホッとでき、安心して過ごせる、心も体も健やかな子どもが育つ場の提供。・ 手作りや木の温かみのあるおもちゃで遊び、いずみ文庫でいい絵本に触れ、隣接の公園でのびのび外遊びをし、自然を身近に感じるなど、子どもたちが安全に楽しく過ごし、みんなで育つ場の提供。・ 親同士の自然な出会いや支え合いができるようなはたらきかけをし、孤立子育てからの脱却、共に支えあう子育てを促す。・ 発達に不安があり育てにくさを感じている親子も過ごせるインクルーシブなひろばのための相互理解を深める取り組み。・ 専門機関とのネットワークにより利用者のニーズに合わせたプログラムを企画。・ 地域情報がワンストップで手に入る、また、利用者のニーズに合わせて紹介し地域へつなぐ役割。内容によっては専門機関へつなぐ役割。・ 地域の人々や他団体との連携による講座やイベントを開催。・ コロナ禍の対応として、入場時のルール決め、清掃、消毒、ひろばの登録制など、安心して過ごせるように工夫。・ オンラインを活用し、ひろばに来られなくても参加できるおたのしみや、たくさんの希望者が受講できる講座を開催。

【一時預かり事業】

- ・保護者の育児に伴う精神的および身体的負担の軽減のため、理由を問わない一時的な預かり保育を行う。（1～6 時間、0 歳は～4 時間）事情により緊急な預かりにも対応。
- ・以下の 3 点を重要な骨組みとした考えは一貫して変わらない。
 - * 命を守り無事にお返しする。
 - * 安心して保護者を待てるような子どもの心の安定。
 - * 安心して子どもと離れていられるような保護者からの信頼。
- ・コロナ禍の対応として、同時時間帯に 5 名の定員を 3 名に減らし、早朝、夜間を時短、宿泊対応は休止など、制限をかけた上で、預かりが必要な親子ができるだけ利用できるように継続。ただし感染力の強いオミクロンの広がりを受けて、家族に体調不良の人がいる場合や濃厚接触者がいる場合なども利用を遠慮していただくなどのお願いをしている。

【小規模保育事業】

- ・常勤保育士を中心に、愛着関係を土台に一人ひとりの状況に合わせた保育を展開した。

保育の基本理念基本方針

- * 一人ひとりの子どもを愛し、尊重します。
子どもが最善の利益とその権利を尊重され、心身共に健康で、未来を創造する基礎が育つよう、チームワークを活かして保育する。
- * 乳幼児期を豊かにするために家庭と連携します。
人間性の土台が育つ大事な時期として、それを十分認識して子育ての喜びを共有し、乳幼児期を豊かに生きるために保育者と保護者が連携していく。
- * 地域から生まれ、子どもをまん中に地域が支え合う関係づくりをめざします
地域の自然や様々な物的・人的資源、文化を保育に活かします。また、子育てを通して多世代がつながりを深める拠点となり、地域全体の福祉や家庭支援に寄与していきます

保育目標

- * 自分が好き、みんなが好きなこども
- * 心も体も健やかな子ども
- ・子ども一人ひとりの心と身体の成長発達を保障する。
- ・家庭との連携を密にとり、自我の目覚めと拡大型という成長の意味を伝え、保護者の気持ちを支えながら、子育てを一緒に楽しめるようにする。また運営委員会で保護者代表として対等に意見を出す機会を通して、よりよい運営をつくる立場でかかわってもらう。
- ・多世代、地域の子育て家庭、近隣の園など、地域とのかかわりをひろげる。（今年度はできる範囲で行った）
- ・保育者の資質向上と保育の質を高めるための研修をする。
- ・常勤保育士の採用を進め、保育運営をスムーズに行えるようにし、働きやすい環境づくりを進める。

【新型コロナウイルス対応】

- ・ 会議や事務仕事などにリモートを活用し、不必要に集まらないように工夫をしている。
- ・ 消毒は厚生労働省のサイトを参考に、アルコール、次亜塩素酸ナトリウム、界面活性剤を用途に応じて使用し、新型コロナウイルスに効果のある方法をとっている。
- ・ 24 時間換気システム、窓開け、空気清浄機を使用。
- ・ 職員用に抗原検査キットを用意。（濃厚接触者などの職場復帰前検査などに使用）
- ・ 一時預かりの送り迎えは、入室させず玄関で受け渡しを行っている。
- ・ ひろば利用は、玄関ゲートの外で、検温、消毒を確認し、家族を含めた体調などの口頭確認をし、さらに、混んできたら公園に出るか早めに帰ることをお願いして了承を得たうえでゲートを開け、入室としている。密を避けるため、午前、午後で利用年齢を分けることは継続中。
- ・ 保育室へは、ひろばとの動線を分けて、公園側を迂回して入るようにしている。
- ・ 職員や利用者に感染者が出た場合の対応マニュアルを用意している。

【事業効果・波及効果】

【子育てひろば事業】

- ・ 今年度は「日常となりつつあるコロナ禍で、安心してひろばを利用してもらうための取り組み」、「リアルとオンラインを使い分け、楽しみと学びと相談が、気軽にできるひろば」について意識しながら進めてきた。
- ・ ひろばスタッフ 2 名が、新たに保育士資格を取得した。

「はじめてのひろば」（月 1 回）

はじめていずみのひろばを利用する妊婦～12 か月を対象に、予約制でひろばの紹介をする日を設けた。月 1 回の予定だがいつも申し込みが多く、2 回やった月もある。予約をしたので確実に迎え入れてもらえるし、参加者がみんな初めての方だと思うと、第一歩のハードルが下がる。いずみのひろばのなりたちの説明や、利用の仕方だけでなく、市内のたくさんのひろばの情報も提供。これをきっかけに、ひろばに継続してきてくれる方も多い。また参加者同士が一緒に遊ぶことによって仲良くなり、一緒に他のひろばに行ってみたという話もきいた。

「保健師さんのいるひろば」（月 2 回）

包括支援センターが立ち上がり、担当保健師が来てくれるようになった。保健師さんにひろばスタッフと同じエプロンをつけてもらい、スタッフの 1 人として自然に溶け込んでもらうようにしている。遊びやおしゃべりのなかで、気軽に相談ができる。

「悩んでいることを聞いてもらって気持ちが楽になった」という保護者がいたり、日ごろのひろばでの親子の様子から、スタッフが気になっていることなども情報としてあげて、保健師さんに注意深く対応してもらうこともできている。必要に応じて情報を検診などに共有してもらうことも可能になった。利用者にも浸透してきたので、ちょっとした心配事があると、保健師さんの来る日にわざわざ遊びに来る親子もいる。

「パパ講座」

- ・ 「パパと遊ぼう・外遊び」父親と子どもが公園遊びをするプログラム。リトミックのように体を動かしたり、パラバルーンをやったり、一緒に公園の木を観察したり。「初めてダイナミックな遊びをしたが、子どもがこんなに喜ぶと思わなかった」や、「ほかの父親が子どもに接する場面を見たことがなかったので、とても参考になった」などの感想があった。

- ・「パパ大好き、と言われる父になりたいのさ」パパのスキルアップ講座。赤ちゃんとの遊び方、遊びと発達の関係、この時期に知っておいてほしい父親の育児参加の大切さ、赤ちゃんが喜ぶおもちゃ作りなど。定員を超える人気で、追加開催の予定。「両親で受けられるはずの産院での講座がコロナで参加できなかったからありがたい」「遊びが発達に大事だと知り、もっとレパートリーを増やしたいと思った」「母親にはこういった講座は参加のチャンスが多いが、父親向けにももっとやってほしい」という感想があった。

父親も参加しやすい企画は、来年度の育児参加プログラムへつないでいき、機会を増やしていきたい。

- ・離乳食講座、防災講座、保活のはなし、などは、「境おやこひろば」とのコラボでのオンライン講座を継続。人数に制限がないので、リアルでやるより多くの方の参加が可能。また、境エリアは離れているので、いつもの利用者以外の参加も多く、より広範囲の親子に情報などを届けることができオンラインが有効である。

「ひろばを安全で居心地の良い場所にする」

コロナ禍での出産親子が増えて、すでにこれが当たり前ようになってきつつある。人となるべく近づかない、できるだけ外出しない、祖父母の介入も少なくなっている。そういう中で、時々、今までにない奇妙な(?) ことに会うことがある。

- ・2 か月の子どもを水遊びに連れてくる。
 - ・サイズの大きい抱っこひもに新生児を縦抱きにし、抱っこひもの中に手を入れて支えている。
 - ・自分の子どもがよく動くのかどうかわからない。(比較したことがない)
 - ・離乳食が嫌いだと言うが、よくよく聞くとスプーン1杯量が多すぎて口からあふれている。
- など、少し周りを見ればわかりそうなことが、他者とほとんど関わらない育児の中で起こっている。

このような状況を不安に感じ、できるだけリアルにかかわりを持つ大切さも痛感している。安全対策をとり、少しでもリアルで関わる機会を作っていきたいと考える。

月に2回「こらぼの」(中町集会所 こらぼのコミセン親子ひろば) 予約制のため、利用される方が決まってくる傾向はあるが、いつも顔を合わせるという良さもあり、いつもあたたかい雰囲気。当日のキャンセルは連絡なしでよいと、満員の予約でも大抵は来ない方がいる分空きがある。参加者はゆったり遊べてよいが、もったいないと感じる時もある。あまりに参加が少ないときはTwitterで呼びかけたりしている。

【一時預かり事業】

- ・事前に面接や聴き取りをして登録をし、当日にも子どもの情報を聴き取り、安心安全な預りを目指してきた。ひろばの親子の中で、慣れない子どもを預かることから、その子、その子に合わせた預かりを丁寧に行った。
- ・担当スタッフが交代した時や、しばらく期間が空いての預かりもスムーズに行えるよう、情報を共有し、記録を残している。
- ・コロナ禍における対応のひとつとして密にならないように、同時間帯に3人までにすることで、ほぼ一対一の対応になり、余裕をもって預かりができている。
- ・コロナ禍であってもニーズは変わらず、定員を減らしたこともあり連日予約で埋まっている状況。
- ・配慮の必要な子どもも、保護者と相談しながら預かりを行っている。
- ・外国出身の親の利用に関しても、丁寧にコミュニケーションを取って預かりを行っている。
- ・飲食は場所を限定し、子ども同士が対面にならないようにしたり、時間をずらしている。

【小規模保育事業】

●保育体制について

新しい常勤保育士2名（4月、11月）が加わり、常勤保育士が3人体制となった。いつもいる保育士が複数いることで、保育が1日を通して安定し、次の日につながるようになった。また、保育計画作成や離乳食の進め方など、給食やクラスの連携や決断がスムーズになり、話し合ったことに対応して保育が展開するようになった。

●1クラスの異年齢保育について

昨年度に2クラスの子どもを保育者みんなで見ていく体制を試みたが、今年度はそれを更に発展させて合同の1クラスにし、保育者全員で見る体制にした。一人ひとりの育ちをどの保育者も把握しながら、状況に合わせて更に柔軟に対応することができるようになった。自分で遊びたい場所や遊びたいことを選択して満足するまでやりきることができるようになった。また、食事や睡眠の時間は子どものリズムや気持ちに合わせて時間差とし、異年齢のかかわりが増えることで多様な刺激を吸収し、人のかかわりを経験できた。また、1対1のかかわり、クールダウンできる空間など、部屋のレイアウトや時間を工夫した。毎日10分ほどの短時間のミーティングを実施し、保育者全員が思ったことを出し合いながら、子どもたちの様子や自分たちの保育を共有し、次の日につなげていかれたこともよかった。

●家庭との連携について

常勤保育士が担任としていつもいることで、送り迎えのときの会話や連絡ノートを通して、日々の姿とともに成長の過程を共有しやすくなっている。

4月の保護者会はオンラインで行ったが、6月の遊ぼう会は園内で実際に顔を合わせて行うことができた。また、保育参観と面談は、保護者の人数を1人に絞って実施した。

おたよりでは写真と共に子どもの成長を伝えた。また、園が大事にしていることを伝え、保護者の子育てを支える内容を掲載し、保護者にも好評だった。

『おうち文庫』は保護者むけの子育ての本だけでなく、おうちの人と楽しい時間を過ごすための絵本も借りられるようにした。保護者アンケートでも、一人ひとりの気持ちに寄り添った保育についての記述が多かった。

●研修について

- ・今年度のテーマを『すくすく泉公園の遊びを豊かに深く』とし、子どもが遊ぶ姿を事例として集め、どのような経験をしているのか、更にどのような環境を考えるとよいかなどを検討した。身体を動かす活動、感触を味わう活動、自然物(虫、植物、石など)とかかわる活動、などが複合していて、経験が積み重なり、更に違う要素を組み合わせるなどして広がっていく様子がわかってきた。今年度は公園で過ごすことが多くなっているの、必要な活動の保障につながっている。
- ・内部研修として『特別支援教育』について学び、感覚について、一人ひとりを尊重することについて、体験や具体的な事例を通して学び、園として子ども理解の土台をつくることにつながった。
- ・アドバイザーの先生の視察とひろば保育合同の会議を月1回行った。ひろばも含めたすくすく泉全体のことを共有し、保育について深く話し合う機会となった。
- ・キャリアアップ研修の受講や、市役所の全体研修など、外部研修を奨励した。

●運営委員会について

保護者から提案があった園でオムツを用意するシステムを今年度から実施し、希望者が利用して好評だった。セキュリティについては不安を感じている保護者もいるので、ハード面とソフト面の強化について説明した。学識経験者からは、常勤保育士が軸になったことや、新しい視点で前向きに保育を工夫していることを評価された。それぞれの立場からの意見が出しやすい会議になっている。

●今年度は労災2件、子どもの通院2件があった。職員間で、それぞれの要因や対応についての振り返りなどを話し合った。リスク&ハザードの理解のもと、環境改善や状況把握などについて、より一層意識を高めていき、安全な保育につなげていきたい。

【達成目標に対する評価・反省】

●3 事業の連携で質を高める

新型コロナウイルスの影響で、3 事業合同の行事などがしにくい。また、職員の行き来は以前よりも減らしているが、感染防止の配慮をしながら、いくつかの合同企画も行った。

- ・公園を利用した人形劇、クリスマス会、お正月遊びの会などを、保育室とひろばが協力し合って実現させた。保育の子どもたちも、ひろば利用の親子も一緒に楽しめた。
- ・ひろばのベビーマッサージ、はじめてのひろばと『保育所体験・赤ちゃん触れ合い体験』をセットにして実現させた。

●多様な子育てに対応できる施設にする

それぞれの事業で、外国人、発達障害、育児困難家庭などのケースに対応。お互いに情報共有し相談し合いながら対応を進めた。（個人情報については段階的クローズ）

●切れ目のない支援の一翼を担う

今回、「はじめてのひろば」に参加した妊婦さんが、生まれたあとにひろば利用をするという例があった。助産師の産後ケアからの紹介で利用された方がいた。

●地域とのつながりについて

ひろばでは、地域の方たちが昔遊びを教えてくれる「昔遊びの日」を企画していたが、オミクロンの蔓延を受け、中止となった。地域のお年寄りなどとの直接的な触れ合いはなかなか広げられないが、月に1回の読み聞かせの会には継続して来ていただいている。

- ・公園でボランティアさんと水やりなどで交流がある。最近では小学生が、小さい子と砂場で遊んでくれたり、公園のゴミを拾ったりしてくれる。
- ・親子の育児の不安や負担を軽減するため、ひろばの0歳児親子に15分ほどの保育園ツアーを実施した。実際のお皿や離乳食を見て、園児が食べているところを見ることができて好評だった。
- ・デッキから公園にむけて、ひろば親子や保育室の子どもたち、公園に来た人も一緒に、クリスマスやお正月など季節の行事と一緒に楽しんだ。武蔵野赤十字保育園の元保育士が立ち上げた人形劇団『はじめての一步』の人形劇がコロナ禍の合間で久しぶりに公演できた。
- ・連携園のまちの保育園吉祥寺とは日々の公園での交流に加え、芋ほりや観劇などの交流ができた。
- ・武蔵野市立第一中学校2年生を対象に職場体験として『保育士』について20分ほどの話をした。小さな子どもと触れ合う経験が少ないまま大人になっていく実態を目の当たりにした。また、子どもの心身の発達や精一杯生きている姿を写真を通して伝えることで、自分との親の関係を考えたり、子どもの感じ方が変わったなどの感想があった。

●支援者同士の連携

- ・月に1回、定例ネットワーク会議が行われることになり、他の施設との情報共有がスムーズになり、必要に応じて利用者に紹介したりできている。
- ・感染対策についての各施設での取り組みを情報交換でき、当施設の方針を検討する際に参考になった。

●運営体制の安定化と次世代へのつなぎ

4月から1名、11月から1名、8時間常勤が2名増え、保育室に常勤保育士が4人になった。
また、ひろばでは非常勤スタッフ2名が保育士資格を取得した。

●施設改善

- ・デッキがはげたり、ささくれたりしていたため、外周塗装を行った。
- ・盗難などがあったため、自転車置き場に防犯カメラを増設。ほぼ死角がなくなった。

【令和4年度以降の見通し】

新型コロナウイルスの感染防止対策をとりながら、状況に合わせて可能なことを探りつつ活動する。

【子育てひろば事業】及び【一時預かり事業】

コロナ禍が日常となり、人々の価値観も分かれ、気にせず出歩くという親子もいれば、未だ出てくるきっかけをつかめずにいる親子もいる。どちらにも気持ちを向けることが大切だと考えている。すべてを中止にしてしまうのは簡単だが、可能な限り納得感のある実現を考えたい。とても難しいことだが、令和4年度もコロナがスッキリ収まりそうもないことを予想するに、感染防止と、子どもたちの発達、親子の心のケア、地域のつながり…どれも大切にしてバランスを取っていこうと考えている。

- ・ 育児参加プログラムを土曜日に増やしていく。父親が自然に育児に積極的になれるきっかけづくり。手遊び講座、パパベビマ、手作りおもちゃなど。また、家族同士でのつながりをつくるピクニック企画、防災講座など。
- ・ 子どもの発達へ知識と、遊びの提案をする時間を日々のひろばの中に取り入れていき、楽しみながら発達を学べるようにプログラムを組む。そしてその先は、特別な配慮が必要な子どもたちやその保護者への理解へ広げていくことを目的とする。
- ・ 子育て世代包括支援センターとの連携を深め、「保健師さんのいるひろば」「保育コンシェルジュの保活のはなし」に加えて、具体的に利用者に還元できるものを探っていく。
- ・ 子育てひろばネットワークの連携を深め、コラボによる講座やイベント、合同職員研修などを各団体に提案したい。
- ・ 地域の力を活かす場面が、コロナによって減ってしまっているので可能なところから復活させたい。
- ・ 一時預かりは、時短や人数制限を解除したいが、やはり密接に接触しながら預かる仕事なので、職員の安全を考えるとなかなか難しい。本来、家族に体調不良の方がいるときこそ預かりが必要なはずだが、その役割が果たせないというジレンマがある。現在は、人ごみに用事があるようなときには、子どもを連れて行きたくないという理由の預かりも増えている。
- ・ スタッフの質向上については、オンラインを活用して、全体研修、ミーティングを続けていくほか、外部研修の受講、関連資格の取得を促すなどして多方面の専門性を引き続き高めていく。
- ・ スタッフの健康管理、場の消毒、換気などを徹底して、ひろばは予約制や定員制を極力せずに、思い立ったらふと立ち寄れる安心・安全な場を、利用者とともに継続させてゆく。

【小規模保育事業】

- ・ 来年度からA型に移行する。早朝保育を担える保育士の増員をはかり、非常勤スタッフの保育士の資格取得をすすめ、さらなる安定を目指したい。
- ・ スタッフが子どもの姿やかかわり方について、フランクに考えを出せる雰囲気が出てきた。更に安心して色々な感じ方や考え方を話し合える場をつくっていききたい。
- ・ アドバイザーの毎月の視察や会議、テーマをもった園内研修、またオンラインを活用してキャリアアップの研修や市主催の全体研修など外部に自ら学びに行く機会を作っていく。
- ・ 中高生対象の職場体験、ひろば親子を対象にした『保育所体験・赤ちゃん体験』など、内容の充実をはかりたい。小学生とは公園で場を共有する中からつながりを持ち、小学校とも連携していく。
- ・ 近隣の園とは、合同研修会などを通して、子育てを共に学び合う関係づくりをしたい。特にすすく泉公園での遊びの連携、充実をはかりたい。